

「よい事をしてくれた」ーマタイによる福音書講解説教 103ー

マタイによる福音書 第26章 1節～16節

説教 岡村 恒 牧師

「はっきり言うておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」(マタイによる福音書 26章13節)と、この日、主イエスは弟子たちに向かって言われました。とても高価な香油によって、シモンの家中に香りが満ち溢れました。しかし本来、香油は死者の葬りに用いる物です。ですから、この女がしたことは、本当に失礼なことだったのです。

私たちには様々な感覚が与えられており、その感覚は記憶と重なります。この日の香油の香りもそうだったでしょう。香りは主イエスの肌に染み付きました。頭からかけられた香油の香りは、十字架の上にあってもなお香っていたことでしょう。そしてこの出来事は2,000年を経て私たちにも伝えられています。このようなニュースはそうそうありません。ニュースは新しいからこそそのニュースだからです。

この話は、主イエスがどういうお方であることを明らかにする出来事でした。そしてこれは、私たちにも無関係なことではありません。私たち自身の命に関わる、今日でも古びることの無いニュースだからです。

主イエスの地上での最後の一週間について、それぞれの福音書は別々の角度から描きます。過ぎ越しの祭り。これは民族主義的な熱狂的な雰囲気溢れ溢れしていました。エジプトにいた先祖が救い出されたことを記念する祭りです。このメシアの到来を待ち望む熱狂の中に主イエスは入って来られました。そこで救いと裁き、神の国の到来について、主イエスはお語りになりました。永遠の救いを手に入れるようにと、はっきり語られたのです。人間的な束の間の平和を手に入れる話ではありません。地上の平和には必ず終わりが訪れます。人々は目に見える解放と地上のメシアの出現を待ち望み、主イエスを歓呼の声でもてはやしました。しかしすぐに、人々は主を十字架にかけてしまったのです。

主イエスは、香油をかけた女性に対し、「わたしに良いことをしてくれた」、「葬りの準備をしてくれた」、「できる限りのことをしたのだ」と、言われました。この日、この女性がしたことは、実は救いに関することだったのです。主イエスが死を迎えた時に、そこに香油の香りがするということが大切であったのです。

この女性は収入を得ては香油を買い足して蓄えてきたことでしょう。年収の何年分もの香油

だったはずで、自分が持つすべてであり、唯一最大の宝。自分が葬られる時のための香油であったでしょう。この日の行為を主イエスは、女性にできる最大の行為であったと言われました。この女性は神に導かれて香油の壺を割りました。この日の出来事は、今日も私たちにも伝えられています。死んで葬られる方に付いてまわる香りの話です。主の十字架への道に関わった人々は、この香りを一人残らず嗅いだ筈です。主イエスは本来、この香りとは無関係な方でしたが、その香りを染みつかせたまま十字架へと歩まれたのです。

これは、本来私たちに染み込むはずの香りでした。主イエスは、すべての人の身代わりとなり、死と滅びの香りをその身に帯びて下さったのです。主イエスが地上に来られたのは何のため、誰のためであったのか、死者のための香りがそのことをはっきりと示しています。主はあの日私たちに代わって、頭のとっぺんから足の先まで、死と滅びの香りを全て引き受けて下さいました。

主イエスが「わたしのからだ」と言われたパンを頂き、「わたしの血」と言われた杯を飲み干しながら、私たちは主の食卓を囲んで礼拝を守っています。たとえ何も載ってなくても、いつも食卓を囲んでいます。食卓を囲むというのは、家族の話です。ここに神の家族の交わりがあり、ここで家族が養われていくのです。500年前の宗教改革で再発見されたことも、主の食卓を囲む教会の姿でした。ここで私たちは愛すること、愛されることを学びます。主の食卓を囲みながら礼拝を守る時、私たちは神の家族とされ、神に深く結びつけられ、お互いに固く結び合わされていきます。そして、実際には匂わなくても、確かに主の香りが溢れています。

私たちは今、天の御国に向かって歩んでいます。そこで改めて、主イエスがどなたで、何のために来て下さったかを味わい知ることになります。そこには天の食卓が用意され、芳しい天の香りが満ち溢れていることでしょう。この世のものとは思えない、という言葉が何を意味するかを、全身全霊をもって味わうのです。

私たちの罪は、主イエス・キリストの十字架の上かけられました。私たちに代わって死と滅びの香りを引き受けて下さって、私たちに永遠の命が与えられたことを感謝いたしましょう。

(記 説教要約奉仕者)